
自由な人

上口司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由な人

【Nコード】

N99440

【作者名】

上口司

【あらすじ】

短編。フィクションです。

昔、僕がIM（インスタントメッセージ）　つまりインターネットで無料で音声・文字チャットができるソフトウェアで外国語を勉強していたころ、知り合いの中に日本語が異様に上手い人がいた。

その人は日本語以外に何ヶ国語もしゃべる人（話しによると10ヶ国語ぐらいは会話なら問題ないそう）で、しかも何語をしゃべっても一瞬ネイティブと聞き違えるほど上手い。初めて話したとき、僕は彼が日本人で僕をからかっているのだと思っただくらいだ。

しかしそれは、僕が知り合いの中から日本語をしゃべれる中国人やフランス人を連れてきてグループ会話をしたときも同じだった。異口同音に「こいつは嘘つきで、でなければ天才だ！」という。耳が いいのだ。

今でも彼のしゃがれた笑い声を時折思い出す。当人は30歳独身だ、と言っていたが、どう聞いても50代ぐらいだった。後に奥さんがいることも判明したが。

僕は彼を尊敬していた。彼のように語学がたくさんできたら、どんなに自由だろう、と思った。

しばらく話して仲良くなり、夜毎に連絡を取り合っていた。彼は日本語のスラングやら方言に詳しくかった。日本語をタイプする分にはほぼ完璧で、間違いのほうが少ないかった。

ただ漢字については手で書くのが難しいが、読めはするのだという。「あなたでも漢字を書くのは難しいのか」と言ったら、「まあ、俺

の母語はアルファベット書いてるからね」と快活に笑っていた。

やがて三ヶ月ぐらい経って、夏になった。

今度は音声通話が中心になった。「最近字を打つのが億劫になってね」と、相変わらず渋い声で言った。僕は額面どおりにその言葉を受け取って、英語や色々な言葉について教えてもらっていた。

僕は二週間、ヨーロッパ旅行に行くことにした。

有給休暇と夏の盆休みをギリギリまで使い切って、二週間。じゃっかん短い仕方がない。

今まで訓練した語学の腕試しと、各地を回るついでに彼の家を訪ねようと思った。

もう既に彼の家が東欧のとある国にあることを知っていた。(あるとき、手紙を書きたい、と言ったら住所を教えてくれたのだ)

しかし当の彼は声色を変えて、来るな、と一言口にしてきたのみだった。前日まで、旅行の話をしても取り合ってくれなかった。

僕はただ、彼がどんな人なのか会ってみたいと思っただけだった。実を言うと、知り合いは彼だけではなく、他にもいるペンパルや大学時代の留学生たちも訪ねる積もりだった。

そして旅行がはじまり、成田からまずイタリアのナポリ国際空港へ飛んだ。

夏の地中海沿岸は非常に暑かった、ということ覚えてる。そこから、さまざまな観光地を巡った。

僕は海外に行くのははじめてではないので、普通に途中から友人数人(彼らも数ヶ国語を喋る人たちだった)と合流し、卒なくスケジュールをこなすだけだった。だが、頭にずっと彼のことがあった。

七日目、旅行開始から一週間後、僕は電車で国境を越え、友人と「すごい男がいる」ということについて談笑しながら、彼の祖国へ入った。ほとんど全部のページにスタンプが押されて、ぼろぼろにパスポートを握り締めて。

一言で表すと、田舎。

農場と平屋の家屋、あとはいかにもヨーロッパの森と平原、といった感じだった。

東洋人が珍しいらしく、コンパートメントに座っていると他の客にジロジロこちらを見られた。白人の車掌に「キタイスキ？」とロシア語で訊かれたが、彼はすぐに「Chinese？」と言いなおした。「ヤー・イポンスキ（日本人だ）」と答えると、彼は、ふん、と言って何か意外な表情をした後、そそくさと去った。ロシア語ができないと思っただのだろう。

暫くして、とある小さな駅で僕は下車した。本当に何もなかったところだった。

ただ駅構内から出ると、それなりに車は走っていたし人もいた。民家の白壁と、教会（どの宗派なのかは分からない）、偉人と思しき銅像、モスクも建っていた。

友人と道を聞きながら、ようやくその小さな安アパートの一室にたどり着いた。

外観は正直、貧しい、というのが適切だったが。

ノックすると、年配の女性の声が出た。わずかに語気が荒いように思ったが、ドアを開けて我々を見るなり、あっ、と一瞬驚いた顔をした。

数秒もしない内に、現地の言葉でさつと何かを口にした。後で友人に聞いたら「あー、夫がいつも話してるあの日本人ね、遠いのによ

く来たわね、ありがとう」などということを喋っていたらしい。とにかく彼女の表情は、笑ってはいたものの硬かった。

彼女に案内されて、狭い廊下を通ってある一室に通された。そしてはじめて、我々はベッドに横たわる全身不随の中年男性を目にすることになった

想像より彼は小さく縮んでしまつて、以前くれた写真のころよりも明らかにやつれていた。

寝たきりの彼の腕には、点滴らしき管が何本か痛々しく突き刺さっている。

ベッドにはテーブルがついていて、上にはパソコンが一台。

複雑にコードが絡みあつていて、どうやら音声認識機能があるらしい。

一年前の交通事故のせいで首から下が麻痺し、脳も損傷したらしく後遺症で最近では失明寸前だという。

彼は我々が部屋に入ってきたとき、言葉を発しようとして口を開こうとしたが、ためらつたのか何も喋らなくなつてしまつた。

奥さんは目に涙を浮かべて、「彼が自由にられるのは、インターネット上で人と話しているときだけで、このごろはあたしが来ても、出て行け、としか言わない」と言った。友人は臨時の通訳をしながら、

押し黙つたまま横たわる彼を悲痛な面持ちで見つめていた。

僕は、彼の語学学習に成功した秘密を、こんな形で知ることになつてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944o/>

自由な人

2011年7月30日03時53分発行